

年間第二十主日

第一朗読 イザヤ 56・1、6-7

第二朗読 ローマ 11・13-15、29-32

福音朗読 マタイ 15・21-28

2020.8.16

高円寺教会 9:30 ミサ

油谷弘幸神父（東京教区）

福祉の世界では今一番新しく、たぶん主流になっている考え方でしょうけれども、ピア・サポートやピア・カウンセリングということが言われています。当事者同士、困難を抱えている者同士が支え合うという、そういう方向になっていると思います。

以前は、サポーター、支援者が、困っている人、困難な状況にある人に対して、上から手を差し伸べる、何かをしてあげる、という形だったのですが、ある時期から、同じ目線で対等な立場で、というふうになってきました。でも、それでもやはり支援者の方がどうしても優位な立場で力が強いので、不平等な関わり合いができてしまう、で、当事者同士、困っている者同士が助け合う、そして支援者はあくまでその脇役として、徹底的な黒子として脇に寄り添うという、そういう形の考え方になってきました。

どうしても私たちは支援者として主役になろうとしがちです。誰かを助けてあげたい、支えてあげたい、役に立ちたいという善意の思いが強いあまり、助ける主役になって頑張ってしまうのです。あくまで脇役なのだとは自覚していても、「脇役という主役」になってしまう、そういう傾向があるんですが、とことん自分が黒子役、脇役に徹する、陰の存在であり続ける、自己主張しない、そういう姿勢が、もしかしたら、福祉の世界、対人援助の世界などで、また特にキリスト者の信仰生活のありかたとして、求められているのではないか、そんなことを考えます。

今日の第二朗読、ローマの教会への手紙で、聖パウロがちょっとほのめかしていますけれども、キリスト者が救われるというのは、最終目的としてユダヤ人が救われるためなんだよ、という、そういう思いが聖パウロにあります。キリスト者が神の救いに与るのは、あくまでも聖パウロの同胞であるユダヤ人が救われる一つのステップなんだ、という考え方です。特に今日の福音朗読箇所のイエス様の言い方の中にも、それと同様の意味合いが出てきます。「わたしはイスラエルの家の失われた羊のところにはしか遣わされていない」と言われるのです。神の救いはユダヤ人を目がけていました。

こうした神学的な見解について、私は神学生の時に、神学の授業で教わったのですが、授業の終わった時、ある神学生が「俺たち脇役だよ！」と本当に吐き捨てるように言いながら出ていったのを鮮明に覚えています。

脇役に徹するということが、なんか私たちの本心に沿わないものがあるのかもしれませんが、でも、脇役に徹して、残り物、おこぼれを頂くという、そこが私たちのポイントではないか、そこが信仰者としての立ち位置ではないか、そのように思えるので

す。

今日の福音のエピソードの中で、救いを求めるカナンの女性に対して、イエス様は、「あなたじゃない、あなたのところに救いをもたらすために来たのではない」とつれないことを言いながら、「子犬も主人の食卓から落ちるパンくず、おこぼれに与ることはできますよね」と言って、脇役であることを受け入れ、そこを素直に認める、カナンの女性の謙虚な態度、それに対して、イエス様は「あなたの信仰は立派だ」と大いに称賛なさいました。娘の回復という奇跡を引き起こすほどの謙虚さ！！

ここがもしかしたら私たちがイエス様から指し示めされている、心の、信仰の姿勢なのではないでしょうか。

でも、こんな風に申し上げますと、ここには主婦の方もたくさんいらっしゃいますが、主婦の方は多くの場合、黒子に徹してずっとやって来られた方が多いと思います。世界的なものの考え方の中でも、ある時期から、家事というもの、主婦の仕事の重要性というものがいかに見過ごされてきたか、指摘されるようになりました。シャドー・ワークと言って、目に見えない、見過ごされてしまう、大切な仕事。実は人生の中で、世界の中で、社会の中で家事というものほど大切なものはないのに、これは全然労働として捉えられなかったという、そういう長い過去のことがあるって、そういうことを見直そうという機運がありますが、残念なことに今もあんまり変わってないのかもしれない。聖ヨハネ・パウロ2世教皇も『女性の尊厳と使命』という使徒的書簡の中で、女性の皆さんのそういう家事の仕事、尊い仕事に従事していらっしゃることに感謝の念と応援の心を述べていらっしゃるんですけども、私たちの日本社会の中には、そうした視点が、まだ根付いてないかもしれません。

その意味で、本当に家事に従事していらっしゃる、黒子に徹して家族を守っていらっしゃる方が多いところで、ぬけぬけと男性優位の社会状況の中で「男性」の立場にある私が申し上げているのも申し訳ありませんし、「もっと皆さん黒子に徹しましょう、なんて、十分やっているわよ」と皆さんの怒りを掻き立てるのではないかと、そんなふうに思っておりますけれども、まあ、この黒子のところに徹し、逆に、黒子同士でピア・サポートという形で応援し合うこと、教会というのは、そういう場なのではないか。誰かが主役になることではなく、主役じゃない方々同士が自分たちを励まし合うという、そういう場になればいいのかなと、そんなふうに考えたいと思います。

私が作ったお祈りを最後に捧げて、終わりにしたいと思います。

主よ、私を大事にしてください。

私が、私を大事にしたいように、私を大事にするのではなく、
あなたが、私を大事にしたいように、私を大事にしてください。

そして、私を、あなたが大事にしたい方のところに送ってください。

私によって、私を通し、私を使って、

あなたが大事になさりたい方を大事にしてください。

そして、私ではなく、あなたが大事になさりたい方を大事にしてください。